

## 一 評論

### 【解答例】

- (一) (1) 増幅 (2) 排除 (3) 滞在 (4) 網目 (5) 建立
- (二) 朝に響く臼の音色が、眼に見える村人たちのみならず、眼に見えない神をもよろこばせるはたらき。(45字)
- (三) 梢からの音で村の位置を知らせるブバリンを、塔からの光で港の位置を知らせる灯台に喩えている。(45字)
- (四) 声という音が、人間が作った言葉以前の世界で人間と野生とを同じ次元で交わるようにする状態。(45字)
- (五) 人間が作った言葉から一度離れ、音による眼に見えない存在や野生生物との交流にも着目して、どのように言葉が生まれたのかを捉え直そうとする態度。(69字)

### 【解説】

- (一) 易しい。完答が望ましい。
- (二) 傍線部(ア)直後の段落の表現をまとめることがポイント。「朝ごとにつく臼の音」が眼に見える人間だけではなく、眼に見えない神をもよろこばせる手段であったという主旨で解答を記述できればよい。
- (三) 傍線部(イ)直前部の表現をまとめることがポイント。「遠方の森のなかにいる狩人が自分の村の所在を知る」ための道具としてのブバリンを、光で位置を知らせる灯台に見立てている点が答えられればよい。
- (四) 声という音が、言語化される以前の次元において、自然と人間とを交わせる媒体として機能することを記述するのがポイント。バリ島の「魚をかたどった墨色の凧」が発する声から、「魔の世界との交流、交感、共存が、あの奇怪な音によって、不思議なうなり声によって、果たされていたのではなかろうか」と筆者が推測する傍線部(ウ)直前の記述から、解答は導出できよう。言葉にはない音の機能に言及できればよい。
- (五) 設問の「本文全体の趣旨をふまえ」の表現を「(二)～(四)をふまえ」と理解し、「言葉」と「音」との対比をしつつ、言葉以前の音の世界に立ち戻ることによってのみ可能な言葉のよみがえりを目指そうとする筆者の考えを指摘できればよい。

## 二 小説

### 【解答例】

- (一) (1) 小さいが落ち着いた雰囲気 (2) 司書からの突然の言葉にひるむこと  
(3) 他人行儀な様子で親しみを感じなかった
- (二) 長い間隠れていた所を「小父さん」に見つかり、仕方なく姿を現してやろうとする様子。(40字)
- (三) 突然声をかけてきた司書が自分の読書傾向を言い当てるとは予想していなかったから。(39字)
- (四) 司書が発見した、鳥に関わる本だけ選ぶ「小父さん」の借り方。(29字)
- (五) 鳥を通し亡き兄と繋がっているのではなく、ポーポーの撤去と司書の声から、実は本を通し生きた司書と結びついていると気づき、彼女にまた会いたいと願う心情。(74字)

### 【解説】

- (一) 辞書的な意味を答えるのが無難だが、文脈に配慮し、多少誇張した表現でもよいだろう。
- (二) 「やれやれ」が「仕方なく姿を現してやろう」という気持ちの表れだと指摘できるのが最大のポイントだと思われる。その主体が実際の「鳥」なのか「本」なのかは明確にしない書き方のほうが無難。
- (三) 「いつも、小鳥の本ばかり、お借りになるんですね」という司書の突然の声かけに対して、「小父さん」がひどくうろたえたという、傍線部(イ)周辺の場面描写に着目することがポイント。司書に突然声をかけられたこと以上に、その発言内容が自らの借りる本の傾向についてぴったりと言い当てるものであったことに「小父さん」が驚いたという指摘が重要であろう。
- (四) 「小父さん」が鳥関係の本しか借りない法則、という指摘はたやすいので、その法則を司書が発見した、ということに言及できるかどうかで差がつく問題だと思われる。
- (五) 難しい。設問に「心情の変化に着目して」とあるので、「before (それまでの「小父さん」の心情)」→「きっかけ (「小父さん」の心情の変化を促した契機)」→「after (変化した後の「小父さん」の心情)」という推移と、「死んだ兄」と「生きている司書」との対比を意識する必要がある。まず、「死んだ兄」が「鳥のさえずりのような言葉を操る存在」であり、「鳥」「小鳥」のモチーフが兄と「小父さん」を結びつける紐帯として機能していることをリード文の記述から読み取る。つぎに、ポーポーが撤去されたことから「お兄さんがポーポーのために特別に選ばれた人間であったことが証明されたのだ」と感じる「小父さん」の心情表現と、「小父さん」の読書の傾向を言い当てた司書との出会いに着目し、ポーポーの撤去と司書との出会いが「小父さん」の心情を変化させる契機となったことを記述する。最後に、「小父さん」のなかで「返却は二週間後です」という司書の声がリフレインしていることに着目し、小鳥の本が「小父さん」と司書とを結びつける紐帯として機能していることをとらえる。以上の心情の変化に加えて、傍線部(エ)にある「彼女の声をもっとよく聞きたくて」という表現を、「小父さん」が司書に再び会うことを強く願っていることと解釈することができれば、おおよそ合格点の解答であろう。

### 三 古文

#### 【解答例】

- (一) (1) 自分の髪を切って市場に行き、酒に換えてきました  
(2) 自分ほど有能な人間もないようだが  
(3) 悔ってお考えになるな
- (二) 妻が夫のことを、世の中は無常だから、将来きっと今の貧しさから抜け出せるだろうと言っている。(45字)
- (三) 働き者の隣家の主人だけをほめ、自分のいい加減さを責める態度。(30字)
- (四) 夫のため髪を切り酒に換えたのに、夫が妻としての自分の容姿や性格を責め、その上尼になり家を出て行けと一方的に言ったこと。(59字)
- (五) 貧しい時に仲良くするのは簡単だが、裕福な時もそうであるのは難しいこと。(35字)

#### 【解説】

- (一) (1) 「しかじか」は「これこれ」という意の指示語。「口語訳せよ」という設問ではあるが、指示内容を具体化した方が無難。女は自分の髪の手と引き換えに、夫が好きな酒を手に入れたことを説明する必要がある。  
(2) まず文脈から「 」内の台詞は酔っている人、つまり夫のものだと分かる。次に「おのれ」は一人称・二人称どちらにも使われるため注意が必要である。会話文では相手の動作に尊敬語を用いることが多いにも関わらず、傍線部はそれがない。そのためここでは夫が自分のことを評したものだと考えられる。そして「おのればかりの人」は直訳すれば「私ほどの人」という意味だが、後文で「時が来ない限りこのような不本意な世渡りをするのだろう」(時至らねばかく言ふかひなき世渡りをもし侍るなれ)とあることから、夫は自分の才覚に一定の自信を持っていることが読み取れる。また「ざんなれ」と「撥音便+なり」の形ができている場合、「なり」は伝聞・推定の助動詞であることにも注意したい。  
(3) 「な...そ」が禁止表現、「おぼす」が尊敬語であることを意識して訳出する。
- (二) 傍線部のある台詞は「かなしき人の髪をさへ切らせけることよ」という夫の嘆きを受けてのものなので、妻のものであるとわかる。傍線部は「このように(貧しい状態で)終わりになってしまいなさることはないでしょう」の意。直前が「定めぬ世にしあれば」と「已然形+ば」で順接確定条件になっており、「定めぬ世」を「無常観」(永遠に続くものは何もない)と結びつけて考えられれば、「今は貧しいが、将来もそうであるとは言えない」という解答の骨組みができる。
- (三) 傍線直前部の要約問題か。「今は貧しいが本来有能な人間である自分が、地味で着実な生活をしている隣家の主人と比較され批判されるのは心外。お前は世間知らずだからそんなことも分からないのか」という夫の心情を要約することが求められていると思われるが、三十字という制限字数内で表現するのは極めて困難。
- (四) 妻の夫への愛情による行動に気づかず、むしろそのことを責め立て、さらに離縁をも迫る夫に対する驚き・呆れが説明できればよい。
- (五) 最終段落「くるしき中には親しむは易く、たのしき折にうとくせざらんはいと難くなんありける」をまとめればよい。ただし「たのし」が「くるし」と対になって「裕福だ」という意味を持っているのに気づかなければならないことと、一般論とは異なり、本文では「くるしき中」破局を迎えた夫婦の姿(女はあまりのあさましさに...夜のほどに出でいきけるとぞ)が描かれていることが理解できないと解答に苦しむ。

## 四 漢文

### 【解答例】

- (一) (1) すなわちしんゆうにつき (て) (2) みなこれによりていづ
- (二) (a) 世間で評判になった (b) 後年
- (三) (ア) 蔵書閣に収蔵された本 (イ) 李濂の二人の子供達
- (四) 李濂の蔵書がいくら多くても読まれなければ無益だということ。(29字)
- (五) 本不足な環境でも必死に勉強し名を成した昔の大学者に比べ、蔵書に恵まれた子供達にはこれを活用し学問に励むよう伝えたい意図。(60字)

### 【解説】

- (一) 易しい。確実に得点したい。(1)「乃」「就」がポイント。「そこで親友に近づいて」という意味になる。(2)「由是」がポイント。「全てこのようにして生まれた」という意味になる。
- (二) (a) 古文でも「きこえ」が「評判」という意味を持つことを知っていることより答えやすい。  
(b) 辞書的には「後日」と近未来的な訳し方をするが、学業の成果が出る時の話をしているので、思い切って少し遠い未来の話をしていることが分かる訳のほうがよいと思われる。
- (三) (ア) 傍線直後に「有不能尽者矣」(読み尽くせないほどあるだろう)とあるのがヒント。  
(イ) 傍線部の「称」が「称赞」の意であること、直後の「此」が傍線部の「之」同様、李濂の子を指すことに気づくことができるかが問われている。
- (四) 句形のポイントは反語。それまでの話の流れで、「蔵書閣」には多くの書籍があること、しかし放っておけば本は鼠や虫に食われてしまうだろうという点を押さえていれば、(読んで勉強しなければ)蔵書が多いと言っても何の役にも立てられない、という説明はしやすい。なお、「口語訳せよ」ではなく「説明せよ」という設問の要求なので、逐語訳の必要はない。
- (五) 問われているのは、「筆者が本文で三名の学者に言及した意図」であることに注意しなければならない。まず三名の学者に共通するのは「本が入手しづらい環境にありながらも、工夫と情熱により懸命に書物を入手する手立てを考え学び、大学者になったこと」であることをおさえておく。さらにそれを踏まえたうえで、筆者は、三名の学者のおかれた環境と、充実した「蔵書閣」がある現在の環境とを対比させつつ、子供達に勉学の勧めを説いているという点にまで言及する必要がある。本文冒頭の「古人...今人...」という表現からも過去と現在との対比が読み取れよう。